

F. kamimurae と新名をつけておいたが、最近になって上村博士も *F. akisawai* という新名をつけられた。同じものである。

○附子に関する民族植物学的一考察 (藤田安二) Yasuji FUJITA: An ethonobotanical consideration on the poisonous aconite “Fusi” (Futsǝ)

本草に言う附子は有毒な根を有する *Aconitum* の一種で, *A. Fischeri* Reichb.¹⁾ あるいは *A. chinense* Sieb.²⁾ とされていたが, *A. Carmichaeli* Debx.³⁾ であることがほぼ確実となった。

李時珍は烏頭に附して生じるものを附子とし, あるいは冬に採ったものを附子, 春に採ったものを烏頭と言うとも言われ, また一歳のものを側子, 二歳のものを烏喙, 三歳のものを附子, 四歳のものを烏頭, 五歳のものを天雄と言うとも言われる。附子, 烏頭, 天雄等はすでに神農本草経に出で, また上記の説は太平御覧等にも出ている。

しかし附子とは烏頭に附いて生じるから附子と言うのではなく, こう言う考え方は誤りで, その名称の真の起源は確かに別にある。そしてこの附子がもととなって烏頭, 烏喙, 天雄, 側子などと言う根部の種類を示す名前が生れたのである。これは植物名実図考などの記事を見ても容易に想像がつく。

Aconite をインドにては Hindi で bis, bish と言い, これは Sanskrit の visha, viṣa から来, visha とは poison を意味する⁴⁾。中国の附子はこの bis, visha などに対する同音の宛字であり, これはその利用がインドから中国へ伝わったためと思われる, Nepal, Assam 方面から雲南, 四川方面の原住民を媒介として⁵⁾, 矢毒としてまず伝播されたものにちがいない。

今インドその他の *Aconite* の土名のうち bis, bish 系のものを示せば次のようである。アラビアの bis はもちろん Hindi の bis が伝ったものである。

まず最も多く矢毒に用いられる *A. ferox* Wall. を Arabia にては bish; Assam にては bish, Bengali にても bish; Hindi にては bis, bish; Nepal にては bikh, bish または bishnak; Persia にても bishnag; Sanskrit にては visha; Dravida 系の Tamil 語では vashnavi; 同じく Telugu 語では atavasa, vasanabhi などと言う⁶⁾。

つぎに *A. luridum* Hook. f. を Bengali にては bish, butsnabbish; Nepal にては bikh, bish あるいは bishnak; Telugu にては ativassa と言う⁷⁾。

また *A. heterophyllum* Wall. を Bombay では atvika; Gujerati では ativish; Hindi では ativika; Marathi では atavish; Sanskrit では visha, visharupa, upvisha, ativisha, vishva などと言い, Telugu では ativisa と呼ぶ⁸⁾。

中国近代の附子の音 futsǝ, futzǝ, fu-tse, fuzi 等は bis にはやや遠いが, 呉音によって中国より伝わったわが国の呼称 busi は bis, visha に甚だ近い。

Busi はわが国においてはブス (bus) とも呼ばれる⁹⁾。Ainu もこのものを busi, pusi とも言うが、これは日本名の伝播であって、Ainu の固有名は surugu, suruku, shuruku 等であり、これもまた毒を意味する¹⁰⁾。

なお小野蘭山口授、重訂本草綱目啓蒙には烏頭の異名として證類本草を引いて異負を与えるが、これは明かに書き誤りで、證類本草にも、呉氏本草¹¹⁾にも果負とあって異負ではない。また本草和名にも果負とある、ただしこの果負は卑負と書かれることもあり、恐らく古代西南夷の呼称の一つに由来するものと考えられるが、筆者にはまだよく分らない。

蘭山はさらに和名鈔を引いて附子の和名としてイフスを挙げるが、これは「為附子」を棒読みにした誤りに起因するものである¹²⁾。

また岩崎灌園もその本草図譜、第 19 巻にやはり蘭山に従って烏頭の和名として「いぶす」(和名鈔)を挙げる。これはフスよりもブスの方が正しいと思ったからであろう。

近來石川元助氏¹³⁾も Sikkim, Assam など Himalaya の東南部を占める地域はトリカブト毒矢文化の Original center とも考えられる重要な地域であるとし、中国語の附子なども案外 Assam 語の bish が音訳されたものかも知れないとされ、bish を Assam 語までさかのぼられるが、インドにおける Aconite の分布は Kashmir を西の中心とする Himalaya 南麓一帯であり、筆者はその名称の起源は確実に更にさかのぼって Predravida 系または Austro-asia 系のインド先住民族語にあると考えるものである¹⁴⁾。

前報において筆者はすでに多数回にわたってインドにおける Predravida 系植物名の Sanskrit 名への影響およびその各地への伝播について述べ、またその中国およびわが国の古代名への連関を主張したが、特に最近述べたナス *Solanum Melongena* Linn. の問題¹⁵⁾、ショウブ *Acorus Calamus* Linn. var. *angustatus* Bess. の問題¹⁶⁾等はこの場合と完全に一致する。

文 献

- 1) Bretschneider, E. 1895. *Botanicon Sinicum*, III, p. 257; Stuart, G.A. 1911. *Chinese Materia Medica*, p. 8; 松村任三. 1915. 植物名彙, 前編, p. 6; Laufer, B. 1919. *Sino-Iranica*, p. 379; 牧野富太郎. 1930. 頭註国訳本草綱目, 5, p. 586.
- 2) 東 丈夫. 1950-1951. 薬用植物と生薬, 4-5: 30; 佐藤瀧平. 1959. 漢薬の原植物, p. 157. 3) 中国医学科学院药物研究所等編. 1957. 中药志, I: 272; 難波恒雄. 1960. 生薬, 14: 57. 4) Laufer, B. 1915. *Toung Pao*, 16: 320; —. 1917. *Sino-Iranica*, p. 582; 清野謙次. 1943. インドネシアの民族医学, p. 355. 5) 羽田 明. 1969. 西域 (世界の歴史 10), p. 110. 6) Watt, G. 1885. *Dic. Econ. Prod. Ind.*, I: p. 87; Chopra, R.N. 1933. *Indigenous Drugs of India*, p. 49; Kirtikar,

- K.R. & Basu, B.D. 1935. Ind. Medic. Pl., I: p. 50; Chopra, R.N. 1965. Poisonous Pl. of India, I: p. 91. 7) Kirtikar, K.R. & Basu, B.D. 1935. op. cit., I: p. 30. 8) Watt, G. 1885. op. cit., I: p. 91; Dymock, W., Worden, C.J.H. & Hooper, D. 1890. Pharmacographia Indica, I: p. 15; Kirtikar, K.R. & Basu, B.D. 1935. op. cit., I: p. 36; Chopra, R.N., Nayer, S.L. & Chopra, I.C. 1956. Glossary of Ind. Medic. Pl. p. 4. 9) 小野蘭山. 重訂本草綱目啓蒙, 卷 13; 貝原益軒. 大和本草, 卷 6. 10) 宮部金吾, 三宅 勉. 1915. 樺太植物誌, p. 21; 工藤祐舜. 1924. 北樺太植物調査書, p. 131; 菅原繁蔵. 1939. 樺太植物図譜, II: p. 891; 古野清人. 1942. 原始文化の探求, p. 161, 164; 宮部金吾. 1949. 植研, 24: 6; 知里真志保. 1953. 分類アイヌ語辞典, I: p. 139. 11) 太平御覧, 卷 135. 12) 古事類苑. 1935. 植物金石部, 2: p. 200. 13) 石川元助. 1963. 毒矢の文化, p. 66; —. 1965. 毒薬, p. 18. 14) Schmidt, W. (山田隆治訳). 1962. 母権, p. 59; 山崎利男. 1970. 岩波講座, 世界歴史, 3: p. 152; 岩本 裕. 1970. Ibid., p. 214, 222, 223. 15) 藤田安二. 1970. 植研, 45: 359. 16) —. 1971. フアルマシア, 7: 247; —. 1972. 香料, 101: 105.

(大阪工業技術試験所精油研究室)

Summary

An ethnobotanical discussion on the Chinese name futsz of poisonous aconite has been performed.

This Chinese name may be considered to be derived from bis or bish of the Old India which belongs originally to the Predravidian or Austro-asiatic language.

○高等植物分布資料 (78) Materials for the distribution of vascular plants in Japan (78)

○ヒメタニワタリ *Asplenium ikenoi* (Hayata) H. Ohba (*Boniniella ikenoi* Hayata) 本年 10 月に文化庁の沖縄大東島調査に参加する機会があり、南大東島、北大東島の植物調査を行った。いくつかの分布上面白い植物をみつけたが、その中でも注目されるのはヒメタニワタリを発見したことである。最初に琉球大学の玉城松栄氏が採集し、原地で初島住彦氏と私とでヒメタニワタリと同定した。専門家に詳しく調べてもらいたいと思っている。標本は東京大学と琉球大学に保存されている。長さ 1 キロメートルにわたる石灰岩の岩壁の最下部のくぼみにはえ、各所に点々と分布している。同じような条件の特殊な場所にしかはえていないので、微妙な生育条件をもっていると思われる。小笠原母島、海南島につぐ第 3 の発見になる。(山崎 敬)